

一般教育としての体育の展望 —暮らしの中の「からだ学」の提唱—

徳山郁夫¹、松岡信之²

¹千葉大学教養部、²国際基督教大学教養学部

Perspective for physical education in liberal arts. —Holistic approach to *KARADA*—

Ikuo TOKUYAMA¹ and Nobuyuki MATSUOKA²

¹College of Arts and Sciences, Chiba University

²College of Liberal Arts, International Christian University

はじめに

今日、一般教育をめぐるその存在についての論議がある¹⁾。一般教育の存在に対して疑問が持たれるようになった背景を、現代の生活をもとに考えるとともに、改めて一般教育の方向を提示し、その中における体育の位置づけを考察する。

本論は、一般教育の「体育理論」に際して「からだ」や現代の生活を取り巻く状況を解説し、「からだ」の意義を再考することを試みるためにまとめられたものである。著者らの意図を理解していただくため、学生への説明に用いた注釈もそのまま付すこととした。

I. 一般教育の展望

1. 「からだ」の遊離

昔は²⁾、ことばが「からだ」から切断されたということから、今日の社会が人々の極めて個人的・個性的な自分の「からだ」に起こる感覚を無視し、社会が求める「発達」「成長」を強いる構造を作りだしていることを指摘し、個人的、個

性的な「からだ」の見直しを行っている。

今日の社会では、ことばに限らずいろいろなことが「からだ」から切り離され、生活が分断されてしまっている。社会集団の中で最も基礎的な第1次集団である家庭というものを例にとってみても、生産、子供の養育、食事、高齢者・弱者のいたわり、病気を癒すことなどが、外の世界に持ち出されて行った。そして、事実その存在基盤は崩れ、親子の関係、夫婦の関係などさまざまな問題が家庭内に生じ始めている³⁾。またこれを反映するように離婚率は1982年をピークとしてその後いくらか低下しているものの相変わらず高く、さらに婚姻率も1971年をピークとして低下している。これらのことも家庭からいろいろなものが切り離されたことの一部を如実に示していると言える。

現代社会は、それぞれが分担する行為や組織によって支えられる社会であると言われる。さらに、現代社会では私たちが生きるために自身や家族内で分担して行ってきたことを機械や他人が代行し

てくれるようになっていく。このように日常的な領域として自分たちで行ってきたことも、専門化、分業化、組織化という波が及んでくるにしたがい自分たちの手から離れつつある。このことは一人一人が生きるために担ってきた負担を軽減するには便利なことではあるが、同時に自らが生きて行く行為を自分の「からだ」や家庭から他人や外の社会に切り離して行くことでもある。

現代は、個々の人間の中に潜在する能力が科学技術の力を借りて「からだ」の外へと持ち出されている。しかも、そこで生み出される機械や技術は人間本来の能力以上に機能を拡張させているのである。しかし、個々の人間に視点を置き換えたとき、自らの能力をそれ以上の機能で代行する機械やそれらを扱う専門家たちの出現は、日常生活における自己の存在を縮小し、日常生活から本来は多様な側面を持っている「からだ」を遊離しかねない。

分業化され、組織化された社会システムによって、われわれが生きる可能性を拡張させてきたことは事実である。しかし、同時にそのことによって日常生活における個々の人間の存在が縮小しつつある。分業化され、組織化された社会システムのそれぞれ特定の接点ではお互いの関わりを自覚できても、そのほかのごく日常的な生活場面で相互依存していることを見失っているのではないだろうか。

とくに都市生活者は、自ら直接生産に携わることなく、生産を他人に依存する消費者としてのみ位置づけられ組織されている。とくにわが国では全国的にこのような傾向を強めている。

2. 隔離された生活

今日、先進工業地域の都市に形成されつつある生活を著者らは「核シェルター型生活」⁴⁾という言葉で表現したい。都市は機械やある職分を専門に行う人々で分業化された社会システムとして組織化された空間である。都市での生活はその内側

の人間にとって自分だけはさまざまな危険や厄介なことを回避し、快適かつ安楽に生活したいという願望が満たされるように作られている。しかし、人々はこの保護された空間の中で、外の空間への関心を失い自分と外の空間とのつながりを自覚しにくくなってしまい、外界との関係で位置づけられている自分を見失っている。

このようなシステムに固められ保護された生活空間では、その内側と外側との間に大きな隔たりを生じさせる。その内側では生産は極めて少なく、消費だけが増大する。煽られた欲望を満たしてくれるモノは内側へ取り込まれ、いらなくなったモノはゴミ、廃棄物として外側へ捨てられる。俗に3Kと称せられる、危険なこと、汚いこと、きついことは敬遠され、目に触れない遠くへと押しやられて行く。そして遠くの自然資源や、そこで生産に携わっている人々、あるいはそこでの生活のことなどは気かけないで済むように、閉ざされた空間の中で安楽と快適さをむさぼるようになる⁵⁾。

そして一見快適な生活の中で、実は一人一人がさらに分断され、一人の人間としてでなく、ある特定の側面だけで存在することを余儀なくされる。このような状況の中では、自己の全能力を発揮し、自己を確認する場面も限られているのではないだろうか。このように自分自身が生きることを他人に依存し、孤独に陥りながら閉ざされた生活を営むことになる。そこでは「からだ」についての認識、すなわち自分自身についての認識は希薄にならざるを得ないのではないだろうか。

3. 「知」の階層性ということ

「核シェルター」に例えられるような閉ざされた空間の中で、安楽で快適な生活が送れるようになりつつある。しかし、その安楽さと快適さは、機械や他人に依存しながら保たれているのである。このような生活ではまさに自分の「からだ」のことや、自分の行動に関する知恵は必要性を欠いてしまう。

この根底には私たちの生活形態の著しい変化があるということはいなめない。この変化をもたらした大きな要因としては、科学技術の発達が挙げられる。科学技術の発達は、自己の外側を操作できる知識をつぎつぎに生み出し、私たちの身近な生活を大きく変革し、安楽かつ快適な生活空間を築き上げる基礎になっている。

もちろん、科学的知識を否定するつもりは毛頭ない。科学は人間の感覚や直感だけでは知ることができない事象を認識する重要な方法である。問題としなければならないことは、今日の社会変革に大きな影響力を及ぼしている科学的知識の価値については知りつつ、一方で身近な「知」⁶⁾の価値が見失われ疎んじられ、それに伴って「からだ」や身近な生活の価値が実感されなくなってしまったことである。

モノを所有することは現代の一つの特徴である。しかし、一方でモノで固めモノに支えられる生活の中で、自分が生活を支える実感を失い、消費することを「文化」であると錯覚してしまっている⁷⁾。そして自分の生活空間をモノで固めることを「文化」と錯覚し、「自分らしさ」さえモノで固める擬似個性によって演出しようとしている⁸⁾。さらに個性を演出するモノと同列に「知識」が置かれはじめたのではないだろうか。すなわち、本当の自分の行動や生活を見失ったまま、自分の判断や行動につながる「知」としてではなく、現代人の象徴としての知識というモノを所有することのみに甘んじているのではないだろうか。その結果、科学的知識を混沌とした多元的な現実世界の解説に動員できるまで習得するに至っていないのではないだろうか。⁹⁾

社会は科学的知識を生み出す人材を求め続けて行くことになるであろう。したがって、そういう人材をより多く輩出するための教育により多くのエネルギーをかけて行かなければならないことは事実であろう。しかしその反面、その煽りを受けて普通の「暮らし」が見失われ崩壊しかかっている

ことには今まで以上に注意深く眼を向けなければならない。

今日の社会ではその社会変革を推進する知識が身近な「知」に対して優位な立場を持つという「知」について階層性を生み出している。そのことによって身近な「知」が軽視され、「からだ」や家庭といった日常の暮らしの中に潜んでいる「知」がないがしろにされているのではないだろうか。しかし、このような「知」こそ人と環境を結び、人と文化を結び、人と科学的知識を結ぶ基本的なものなのである。

シェルターで包まれた生活へと変革されるにつれ、人々は「暮らし」の中から生まれた「知」について関心を向けずに生活できるようになったのである。身近な「知」への関心の欠如は、自分を「暮らし」から切り離すだけでなく、自己の行動の主体としての「からだ」からも切り離してしまっている。言葉が暮らしの中の直接的な「からだ」の感覚から切り離されたように、知識の一つ一つが生活から切り離された断片的な存在になり、生活の中で意味を持ちにくくなっていることが指摘されよう。

4. 一般教育の課題

現在の社会状況をこのように分析すると、既成の学問体系に従って単に知識の伝達を行うだけでなく、自己の立場を知り、そこからミクロの方向やマクロな方向へと「知」をつなげること、あるいはさまざまな分野の科学的・専門的知識と日常的・体験的な生活から得られる「知」を結び付けることを「一般教育」として再編成することが求められるのではないだろうか。

このことによって、きわめて日常的な生活の価値を再認識し、より確かな自己確認が可能になると考える。そして今日の大学教育では専門分野の知識を個人の体験的な「知」と結び付けたうえで個々の専門分野の問題を再認識することが重要なのである。

文化は行動の多様性である¹⁰⁾。一義的な効率の追求ではなく、いわば遊びの肯定である。文化の基盤として、多様性を許容することが重要である。ところが、時代の流れの効率至上主義から生み出される最先端技術のみを追いかけ、ときとしてそのことに振り回されることは、多様性を見失うことになってしまう。一方、日常の暮らしは多様性の中に営まれるものである。したがって多様性を確実に確保するためには日常の暮らしを見失わないことが重要である。また、自己の主体としての「からだ」も多様な行動様式を持ち、文化の本質と深い関わりを持っている。すなわち「暮らし」や「からだ」の存在の確認こそ文化の多様性を見失わない重要な鍵となるものであり、現代社会において極めて重要な教養となるものである。

一般教育の課題をこのように考え、さまざまな「知」をつなぐ視点として「暮らし」と「からだ」を提唱するものである。

[注釈]

注 (1)

次に示すものはアメリカにおける体育についての論議であるが、わが国における一般教育、そしてその中の体育についてまったく同じことが言える。

「今日においては当局の目が鋭く各教科のカリキュラムに向けられており、幾つかの教科はその存続さえも危ぶまれている。その背景には、まず、学校カリキュラムが肥大化をきたしてしまい、ある程度の削減が必要と考えられていること、また、今日のわが国の経済状態の悪化ということも、いわゆる費用の嵩む教科を整理させる動きを招いているといえる。」

B. Jagger「体育とヒューマンムーブメント」(J. E. kane編著；梅本二郎・川口 貢訳「ヒューマンムーブメントと体育」) p.13、不味堂、1987

注 (2)

「もとはと言えば誰しものが、この世界にじかからだで触れ、感じ、うけとめ、その感覚から初源のことは

生み、そのことばが新たな感覚を創造するという場と時間を約束されていた。……しかし、人類史の『発達』や個人史における『成長』ということのなかには、からだの制度化もしくはからだとことばの切断の過程が含まれている。むしろ、ある意味では、からだごとつながらないように馴らされてしまうことそれじたいが『発達』とか『成長』とみなされるのだとさえいえる。現代社会の人間はあらかじめからだを見失い、内側からからだを感じることができないものとして現実のなかにおかれる。」

菅 孝行「関係としての身体」れんが書房新社、p.44、1981

注 (3)

社会の変化と家庭機能の問題は、数多く指摘されている。ここでは親子の間にあった社会の情報の提供による教育という部分の変化を指摘した例示にとどめる。

「家庭の機能が低下したのは、親子のあいだが疎遠になったからではけっしてなく、じつは、親が子にたいして社会的、文化的、権威を維持しにくくなったからなのです。そうした権威は、親が世のさまざまな情報を持つことによって可能になるのですが、情報化の進んだ社会では、親にも子にも共通に情報が与えられてしまい、親がなかなか権威を保てなくなっているところに問題があります。」山崎正和「自己発見としての人生」p.198、TBSブリタニカ、1984

注 (4)

「核シェルター型生活」

ジョギング、エアロビクス、シェイプアップ、ダイエット……。この様な現代の健康への関心を少し見方を変えてみると、不健康な現実の社会からガラス張りのきれいなスタジオに避難して、いい汗を流し、コンピューターの指示に従ってワッセ、ワッセと力を出し、かつては当たり前だった自然食と呼ばれる安全な食品をわざわざ高いお金を払って手にいれる。

まわりはともかく自分だけは健康でありたい。そう願うのは当然かもしれません。人々が自分の健康に関心を

持ちながら、一人一人が個室の中に分断されて、閉じ籠っているのが現代なのかもしれません。しかし、まわりの社会が健康でなければ本当の意味での健康はあり得ないのです。

核シェルターの使用説明書の中には、シェルター内に持って行く物として機関銃があるそうです。使用目的は外から放射線に汚染された人が入ってこないようにするためだそうです。外の世界とのつながりを閉ざして自分だけは健康でありたいと思う考えは、この核シェルターに象徴されるのではないのでしょうか。

「ウェルネス」は、自分だけは何とか健康にという「核シェルター生活」タイプの考え方から一歩進み、お互いにコミュニケーションをして真に人類にとっての健康を追求する活動と言えます。

竹内は、身も心も固く閉ざした状況をとらえ、特に身に働きかけながら通りのよい「からだ」へのレッスンをを行っている。この固く閉ざした状況は、このような現代の生活を反映しているものとも見ることができる。

「主体としての子どもにとって『いい』とはどんな条件かを考えてみるとまず『ひとの話がよく入る』ということ。別の言い方をすれば、『ひととふれあえる』、つまり自分だけ閉じこもってしまうとか、攻撃的になって乱暴に人を叩きのめすのではなく、お互いによくふれあえること。それから『入ってきたものが自分の中でよく動き増幅して自己表現となってでていきやすいからだ』。こんな言い方ができるだろう。」

竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」ちくま書房（ちくま文庫）、p,248、1988

注 (5)

フォックスは、現代の都市生活者の特徴をとらえて次のように説明している。これは閉ざされた空間の外側に気に懸けずに、その内側に生活する者の世界を描写するものといえる。

「現代の生活は、わたしたちを自然のリズムから隔離するいっぽう、絶えず前に進むことを要求する。これでは、身体ばかりでなく精神的にもストレスがかかるいっ

ぽうだ。現代人は自らの身体に耳を貸す方法をふたたび学ばなければならない。……バプロフは、さまざまな性格のイヌを使って研究し、非常に興奮しやすい神経系を持ち強要された制止や報酬が遅れるのをがまんすることができないイヌがいることを見つけた。……バプロフは、この興奮しやすいタイプのイヌと、自らの性質を変えてストレスの高い現代の生活様式—ここでは万事が皮相的で、まわりに歩調を合わせなければならない—に適應した人とは似ている。つねに活動している人は、即座の報酬、その場の満足、直接的なサービスを期待し、また逆に、遅れや強いられた制止には対処できなくなり、簡単に失望し、攻撃しやすくなる。」(p,36~40)

……「自殺、薬物療法、刺激渴望は、大衆娯楽、スポーツ、飲酒、麻薬とセックスパーティー、レジャーランドでの週末の行楽等によって、部分的には満たされる。エンカウンターグループや感受性訓練の集まりもいくらかの救いになるかもしれない。しかし、働くことだけで、遊ぶことを組み込まれていないこれらの見捨てられた『ロボット』は、快楽原則を部分的にしか実現できないのである。

労働は、選ばれた少数の特権となり、多くの人々は、たんに自からの活力を保ち、退屈からのがれるためのみ仕事を持つ。周囲のさまざまな入力に完全に依存するようになった神経系は、怠惰と退屈さによって崩壊してしまうだろう。刺激渴望は、幻覚剤、テレビや映画という形の視覚、聴覚への入力によっても満たされるだろう。アルコールやトランキライザーは、日常生活のストレスや退屈さを弱め、混み合った都市環境による人間関係のストレスを和らげる。アルコール飲料は麻薬と相乗作用し、娯楽やセックスに伴う感覚的な満足を高める。これらは未来生活の青写真ではない。これが今日の現代社会なのである。」(p,236) M. W. フォックス「動物と神のあいだ—共存のエソロジー—」講談社、1983

しかし、その空間の外側では巨大な荒廃が広がりつつある。環境問題として取り上げられても、その内側に生活する者にとっては実感のわかない問題になりかねない。外に生じている問題の一部をニコルの記述から例示する。

「その産業が島の巨大な処女林を伐採しつくしたのである。地球上で産業化の波にまだ荒されていない最後から2番目の（最後のそれは南極大陸である）大陸であるこのオーストラリアでさえ、森林破壊という深刻な問題をかかえていたのだ。このことを私は、オーストラリアの林業専門家たちからの手紙で知った。彼らは私に手紙をよこし、日本のマスコミを通じて、オーストラリアの処女林の破壊をやめるよう国民に訴えてほしいと、頼んできたのだ。この国の処女林の大部分が、チップやバルブや合板などをほしがる日本の巨大で貧欲な胃袋を満たすために、乱伐の脅威にさらされているというのである。

それに対する私の返事は、どちらかというと否定的なものであった。自国の国立公園や水源地保護地域における木材の伐採さえ許している国民に向かって、日本人からみれば比較的豊富な森林資源のある国についてわずかも関心を持つように説き伏せることなど、いったいどうやってできるというのか。いや、日本の大衆はオーストラリアの自然資源についてなど、これっぽっちも関心など持ちはしまい……いかにそれを安く手に入れるかということ以外には。」(p,107)

「なぜいま、南アメリカに残った熱帯雨林が破壊されつつあるのか。破壊の原因のほとんどは、先進工業地域の需要によるものだ。その地域の人々が必要としている、あるいは必要と考えているもののためなのである。

その主なものはビーフである。いま、アメリカ合衆国では、脂の多い、トウモロコシ飼育で育ったウシの肉はあまり人気なくなっている。人々はもっと脂の少ない、放牧地で育ったウシの肉を求めているのだ。そのためには放牧地をたくさん作る必要が出てくる。こうして南米では多くの森がどんどん破壊されているわけである。」(p,186)

C. W. ニコル「TREE」徳間書店、1989

この他に、アマゾン河のダム建設により河川や森林を荒廃させ現地の安い電力を利用してアルミニウムを精錬し先進工業地域に持ち帰ることや、フィリピンのマンガローブ林伐採など、外側の世界を荒廃させつつ内側の

生活様式を維持させていることを示す例は多数ある。

このような内と外の断絶は、価値観や生活観に大きな隔たりを生みだしている。生産空間と消費空間に生じる感覚のズレを「きれい—汚い」ということを例として示した次の文章を挙げる。

「アグネス：私は『マルコ・ポーロ』の撮影で初めて中国へ帰ったとき、やっぱり感動で体がとけてしまいそうだった。桂林っていう所に20日ぐらい滞在したんですけど、そこの人たちが、物は持っていないけど生活にはリズムがあって、小さなことにも喜びを感じる。桂林の村の道は人間とか豚のフンだらけなんです。雨が降るとベタベタして、もう汚くて歩けない。

最初は『なんて臭いんだろう』と思った。ところが村の人は、いい天気の日には靴をはいているけど雨が降ると裸足になってしまうんです。足は何べんでも洗えるけど靴は洗えばいたむ。第一、フンは汚くないと思っているんです。そのフンで野菜を育てるんだから汚くないと思っている。子供たちは、たくさんフンを集めるとほめられるんです。ドーンとききましたね。ところがフンがあちこちにあるその村に、ゴミは一つもないんです。何でも大切に捨てない。村にはティッシュなんかないし、小さな紙でもたいせつにしまっておいてゴミをださない。」灰谷健次郎「われらいのちの旅人たり（対談）」p,102、光文社、1986

注 (6)

われわれの判断や行動は言語的・分析的な思考のみで進められるものではない。非言語的・包括的な思考をも動員し、これらを根底として進められている。ここで言う「知」とは、言語的・分析的に説明される知識や知恵に加えて、非言語的・包括的な思考、およびその間に動員される「了解されていること」を総括したものである。ただし、本文中では後半の非言語的・包括的な思考の意味に重点を置いて使用している。

注 (7)

消費生活のある側面を説明するものとして、例えば次の二つの文章が挙げられる。生産労働に対する報酬が賃

金のみを集約するとともに、生産労働におけるその成果を人と人の関係にある多元的な実感として享受しにくくなる。したがって生産労働に誇りを持ちにくくなるのであるが、このような構造を土台に「消費生活」が成り立っている。

「カール・マルクスは、十九世紀に、Entfremdung ということば——これは英語で疎外 [alienation] と翻訳された——をつくりだして、自らの生産労働の果実を搾取される産業労働者の状態と機械工業のなかの労働の非人間化とを意味させた。」

R. デュボス「人間であるために」p.13、紀伊國屋書店、1970

「住井：消費文化なんていう言葉がありますが、あれくらい論理に反するものはないですね。生産こそが文化なんです。生産という文化があるから、消費という機能が可能になるだけなんです。消費そのものは文化なんかじゃないんです。」

灰谷健次郎「われらのちの旅人たり（対談）」p.187、光文社、1986

注 (8)

「そうやって『私らしさ』の擬似環境をでっち上げていく以外に、私たちは自分であることを確かめるよりどころがなくなっているようだ。それが作りものの自己イメージにすぎないというのは、個性というものさえ、おしきせメニューの中から、せいぜいチョイスの自由にすぎなくなっているからだ。……モノに所有されずにモノを使いこなす知性が、そろそろ育ってもいい頃じゃないだろうか。」

上野千鶴子「<私> 探しゲーム 欲望私民社会論」p.85 築摩書房、1987

注 (9)

「知識」が「からだ」から離されているという実態を学生自身に知ってもらう例題として、板倉聖宣氏の「雨粒の問題」を取り上げる。「知識」としての落下運動の法則に振り回され、学生自身の経験を通じた感覚でとらえた大粒の雨と霧雨の落下速度に対する知識を

自ら肯定できない例を示す。

〔問題1〕

雨粒にはいろいろあります。いわゆるどしゃぶりのときの雨粒の大きさは直径2～3ミリメートルほどありますが、いわゆるきりさめのときの雨粒の大きさは0.15ミリメートルほどしかありません。大粒の雨は、きりさめとくらべて、直径では10倍以上、体積や重さではじつに1000倍以上もちがうのです。この雨粒が地上にふつてくるときの速さは、大粒の雨ときりさめとではどちらが速いと思いますか。

予想 ア. 大粒の雨のほうが速い。

イ. きりさめのほうが速い。

ウ. どちらもほとんどおなじ速さ。

エ. とくの場合によってちがうので、なんともいえない。

板倉聖宣「科学の学び方・教え方」太郎次郎社、p.14～19、1975

どしゃぶりと霧雨の光景を描いてみればよい。正解は(ア)で、10倍以上も大粒の雨のほうが速い。この間違いは、クイズ形式の教育に慣れてしまったために「どうかな?」という疑問を感じながらも、学校の問題だからという懐疑的な思考が働いてしまったことに由来していると考えられる。さらに現実という混沌とした世界を分析するに際して、一次元的な解釈にとどまり空気抵抗という知識を考慮に入れないこと、すなわち科学ということの学習が中途半端になっていることが考えられる。

注 (10)

丸山は、文化の一側面をフェティシズムとしてとらえている。すなわち構成された構造だけが文化ではなく、人と人、事物と事物、現象と現象という一切の関係が物象化され、これを崇拝する様相が文化の根底にあるということである。このことが様々な欲望を生み出しているのである。人間の文化における欲望は決して自然の秩序の中にあるものではない。人為的・私的に形成される

過剰としての文化という側面を持っている。そしてこの根底にある人間のシンボル化能力の解明をすすめている。丸山圭三郎「文化とフェティシズム」勁草書房、1984
丸山圭三郎「フェティシズムと快楽」紀伊國屋書店、1986

II. 暮しの中の「からだ学」について

1. 「暮し」について

ここでいう「暮し」とは、先進工業地域すなわち日本の都会を例にとったような消費生活ではない。食べる、語り合う、歌う、耕す、遊ぶ、歩く、眠る、癒すなど、生きて行くための当り前の活動が、家庭という社会の基本単位から外へと持ち出されない、一人一人の人間から遠い存在にならない、そしてそれらの活動が巨大な専門制度に組織化されていない日常の生活を示すものである。

巨大な専門制度に組織されるようになり、産業化が進むことによって、家庭はこれに対する消費の場として組織され、給料を得る仕事のみが消費を維持する活動として正統化されている。そして、すべての活動を給料として換算したり、また換算されるような活動につながる「知識」や「技術」のみを習得することに眼が向けられている。

「暮し」とは専門化され、組織化され、分業化された活動ではない。「暮し」とは、自然や生命や身体が存在が見失われず、「からだ」もしくは家庭という最小単位の中に、生きるための基本的な行動を共にする日常的な生活を意味するものである¹¹⁾。

例えば「体力」についても、このような「暮し」の中で考えられるものは、スポーツという局限された場面やこれを専門に行うスポーツマンに要求される特殊な体力ではない。日常の生活の中で生かされる体力であり、「からだ」についての知恵である¹²⁾。

「暮し」とは、いのちを携えて行く営みを分かち合う行為の総称であり、決して隔壁を隔て自分だけが安楽な生活を営むところのものではない。

そのためには人と人のコミュニケーションを基盤としたものでなければならず、一人一人の人間が「からだ」を取り戻さなければならないのである。

2. 「からだ」について

まず「からだ」には空間に占める物体としての身体という側面がある。皮膚によって外界と隔てられた空間の中には、意志と関わりなくこの物体を一定の状態を保ちつつ存続させるべく働きがある。意識するか否かに関わりなく、この空間の外側に起こる変化に対して反応する働きである。たとえば、ホメオスタシスといわれるような作用はこれに相当するものである。

また「からだ」は自己の皮膚の内側の働きだけではなく、外側の空間、すなわち環境との関係において、生存に適した環境を選んで移動したり、環境に働きかけてこれを生存しやすく作り変える。このためには外界の状況をとらえなければならない。外側の状況は感覚器によってとらえられるが、この感覚をもとに意味を組み立てなければならない。それだけではなく外界の刺激をとらえる段階で、意味の組立に必要な情報を集めるために「からだ」の中に潜む指向性を働かせ、特定の感覚に注意を傾けているのである。この外の空間に特定の感覚を働かせる指向性といった部分も、実は「からだ」の一部である。このように「からだ」には、限られた空間から外に向かって広がりを求めるために存在するという側面もある。そして、ここに表れる指向性は歴史や文化を背景として養われる認識体系であり「からだ」における「知」として考えられる¹³⁾。さらに空間に占める物体としての側面とこの空間の外に広がりを求める側面は、意識するとしなにかかわらず相互作用を及ぼしている。つまり、外の空間に向けられる「知」は、同時に物体としての側面の内側にも、外に広がりを求める側面自体にも向けられるのである。

ここでいう「からだ」とは、空間に占める物体

としての身体を示すだけではない。「からだ」は外界の空間にも、自身の存在を維持するための働きかけをする広がりを持っている。また外界のみならず自身の「からだ」を観察の対象とし、その観察による認識に基づいて物体としての「からだ」に働きかけ行動している。「からだ」とは、この物体としての側面、ならびに外界の認識にかかわる精神活動としての側面、そして行為に伴う身体と精神の相互の活動という側面を含むものである。

一方、「からだ」に対する視点を変えて広義に定義するとすれば次のようなことも含まれる。物体としての身体は、時間という視点の導入によってさらに拡大する。「からだ」は外界の物質を同化し、また身体内部で異化することによって生命を維持し、死とともに消滅に至る。すなわち外界と「からだ」の間には物質の流れがある。また認識としての側面の根底には、個々の個体が育った歴史や文化を背景として持っている。同じように行動の指向性にも歴史や文化が反映している。このような「からだ」の成立ちの背景にあるものをも「からだ」とする考え方を示すものとして「拡大身体」という表現を用いる。すなわち、物体としての身体もそれのみで存在するのではなく、外界との物質の交流によって成立しているのである。また認識することからも、皮膚で仕切られた内側だけで認識しているのではなく、外界すなわち歴史や文化を取り込んだ自己の「からだ」によって認識しているのである。したがって、「からだ」についての認識を深めるときには、この「拡大身体」という概念を導入し、広義の「からだ」をその対象としなければ前述の一般教育の課題を達成するものにならないのではないと考える。

図-1は「からだ」にかかわる要因を個人・社会・自然として、その関係を示したものである。図中の矢印(1)については、一つには遺伝と「からだ」という関係、一つには個人の活動・体験と「からだ」という関係が考えられる。さらに「からだ」は、主体自身が観察対象であるという特殊な関係

にある。矢印(2)は各々の社会の歴史や文化から受ける「認識」にかかわる影響を示す。矢印(3)は物質としての「からだ」と自然との間の物質の交流、および自然から受ける認識についての影響を示す。

個人・社会・自然の相互間にも「からだ」に関わる関係が成立している。個人と社会の間には、個人行動を規制する規範があり、間合いという空間を生み出し、社会システムが人の行動様式に大きく関わっている。また、スポーツなどの文化が個人の活動に大きく関わりをもっている。個人と自然の間には、生命観、自然観など非常に大きい影響を受けている。自然と社会の間では風土を受けてその土地に固有の歴史と文化を形成してきたという関係がある。また、近年は汚染や破壊といった社会システムから自然環境に及ぼす影響も無視することができないところまで来ている。

このような広範な「からだ」を「知」の対象とすることが「からだ学」である。

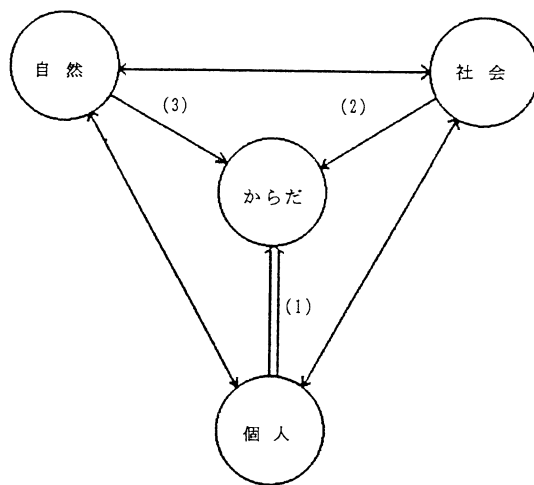


図-1 「からだをつくるネットワーク」

3. 「からだ学」の特徴

(1) 非言語的「知」

「からだ学」は、「からだ」を学ぶことであるとともに、「からだ」で学ぶことである。すなわち、普遍的な人体というよりも、各人固有の「からだ」という側面に基点を持つものである。自己の「からだ」についての「知」は、けして言語的・分析的に表出できるものだけではない。非言語・包括的な了解を根底とするものである。また「からだで知る」というときに、そこで扱われる「知」についても同様のことが言える。すなわち「からだ学」は、非言語的・包括的「知」を敢えて取り上げるところに一つの特徴を持つものである。

運動することが「からだ学」における特徴の一つとなることは後述するが、運動するという場面における「知」の独自性は、このような意味から重視しなければならないことである⁽¹⁴⁾。

(2) 「対象」即「主体」

「からだ学」は「からだ」について学ぶことであるから、「からだ」という対象が同時に観察の主体である点にその大きな特徴がある。すなわち「知」の対象、即主体という構造にある。したがって科学的教育の根幹にある客観的情報を扱うというものではないところに大きな特徴を持っている。これは自身の感覚から自分の「からだ」に対する「知」を形成しなければならないということであり、主観的「知」を敢えて取り上げ、これを検討しなければならないということである⁽¹⁵⁾。客観的情報にのみ従って行動するのではなく、自身の感覚という身近な「知」を生み出す原点に意識を傾けることである。こうすることによって自分の感覚が切り離されてきた社会の中において、自分の感覚と客観的知識を結び付け、自分の感覚および主観というものの居場所を取り戻さなければならないのである。

(3) ヒューマン・スケール⁽¹⁶⁾

現実の生活では自分を取り巻く外の空間に対しても、自己の主体的感覚によるネットワークを張り巡らさなければならない。すなわち、実生活は普遍的尺度で画一的に過ぎて行くものではなく、個性差を持った個人を取り巻いて相対的に流れて行くものである。分業化され、組織化され、効率一辺倒の生活の中ではともすると個人差は無視されることが起こるが、日常的な「暮し」というところでは個人差を考慮した自分の尺度、すなわちヒューマン・スケールで暮らすことが重視されなければならない。自分の「からだ」の主観や能力に基づいて自分の尺度を持ち外界との関係を構成することは、「暮し」の中に「からだ」を位置づけする重要な手がかりとなるのではないだろうか。そしてこのような構造の中に認識の対象を拡大した「拡大身体」という概念を導入したとき、自然や社会との主體的な関わりが期待できるのではないかと考えられる。

(4) 実践学

「からだ学」では自らの主観の主体である「からだ」を活用することによって浮かび上がる「からだ」という側面が学習の対象となる。すなわち、実際の体験を通して主観と客観的知識の同定を行わなければならないのである。客観的知識を集積することだけでは上記のことはまっとうされない。主観を動員し、これと客観的知識を同定することが必要だからである。この意味で「からだ学」は、実践学であると言える。

「からだ」で学ぶということは、自己の「からだ」に現実的変化を伴うことである。今日の生活は擬似環境の中で擬似体験として営まれる傾向が強い。擬似環境あるいは前述の「シェルター」から飛び出し、「からだ」の実践を通して多元的な現実環境を実体験し、「からだ」を基盤として新たな認識と意志決定、そして遂行を学ぶことが「からだ学」の本質である。

自らの「からだ」で学ぶ実践学であるということは、物体としての身体という側面にも変化を伴うということであり、このような動的な「からだ」を体験しつつ適切な認識と意志決定を学ぶということである。さらに、この動的な自らの「からだ」を基盤にした価値の創造を学ぶことである。

(5) 「運動する」こと

「対象」即「主体」という特殊な構造の中では、私たちの通常の認識で大きな役割を占めている視覚という機能を十分に発揮させることができない。視覚によっては「からだ」の一部しか感覚できない。したがって普段はあまり意識的に働かせていない「からだ」の内側にある感覚に意識を向け覚醒させなければならない。たとえば「からだ」の内側に起こる伸展感、緊張感、あるいは平衡感覚等に注意を向けなければならないのである⁽¹⁷⁾。

また、このような内側の感覚と物体としての身体が、その外界との間にどのような現象を生じるかということを考察することによって自分の「からだ」を知ることができるのである。

このように「からだ」を知る手だてとしては、「運動する」ことは極めて大きな手がかりになると考えられる。「運動する」ことによって生じる目には見えない「からだ」の変化、たとえば筋の緊張感、伸展感、リラクゼーション等が外界との間にどのような変化を生じさせているかを「からだ」の感覚をもとに考察することが重要である。

このように「からだ」を知る手段という点からも、そして前述の実践学という点からも「運動する」ことが、「からだ学」に占める役割は極めて大きなものであるということが言える。

4. まとめ——「からだ学」における体育の役割——

従来、体育では健康とこれにつながる体力の増進、あるいはスポーツへの参加や理解につながるようにルールや技術の習得に主眼を置いて指導がなされてきた。さらに「からだ学」として示

した視点を加えることによって、体力づくりやスポーツといった局面だけでなく、生活全般にわたる「からだ」を養う一層充実した体育の実現が図れるものとする。

体育はこの“暮らしの中の「からだ学」”にあって、実践学としての特色ある部分を受け持つものである。動的な「からだ」の動きを学ぶことや、動的に活動し「からだ」に負担のかかる状況下での認識、意志決定そしてその遂行ということは、この実践を通してのみ認識できる「からだ」についての特異な領域であり、これは従来からスポーツ種目の指導を通じて担当してきた部分でもある。

しかし、ともするとそれらの活動の中で物体としての側面に重点の置かれた健康や体力の増進、あるいはその物体としての側面が演じるパフォーマンスに焦点が当てられていた嫌いがある。それらの活動の中で立ち現れる自分の「からだ」についての認識や、「からだ」に基盤を置いた価値の創造こそ見逃してはならない点であるとする。

したがって従来展開されてきた体育の中で、「からだ」についてのいろいろな側面を観察対象として、自覚的にとらえる段階をより積極的に整備すべきである。また、活動の場を体育館やグラウンドに限定せず、自然環境の中で展開される野外活動などにも拡大することは、社会・文化システムが広義の「からだ」にどのような影響を及ぼしているかということを実践的に学ぶよい機会であり、今後一層重視したい部分であるとする。

このような「からだ学」としての体育を整備し、これを実践することが「からだ」に基づく価値の見直しにつながるものとする。

[注釈]

注 (11)

イリイチのヴァナキュラー (Vanacular) ということばによってよく説明されると考えられる。

「産業化に伴って、性的な固有な仕事の分配が、破壊されてきているのです。男と女は、産業化が始まるまで

は、家庭では経済的に同等に重要でありました。産業化に伴って、労働の場が家庭から離れて、家は同時に、その自らの存在を維持するものではなくなったのです。家あるいは家庭は、——日本の家はその極端な例だと思えますが——消費が組織される場となり、給料を得る仕事のみが、唯一、正統化されたのです。」(p,35)

「人間は、食べる、話す、歌う、遊ぶ、歩く、眠る、夢見る。これらは人が人間以外のものおよび他の人とのちを広げあう愉悅にみちた自律的な行動だ。痛みや病の老いや死すらも、元来は人生をより生き生きと享受する仕掛であった。これらの行動や仕掛が、産業の進展とともに巨大な専門制度に組織化されて、逆に人間を支配するようになる。つまり『学ぶ』という行動は『学校教育』でしかなくなり、歩くことはジェット機や高速道路などの『交通』に取って替われ、癒すというすばらしい他者との共同行動も『病院』という冷たい機構に凍結されてしまった。イリイチの仕事の眼目は、こうした産業的制度化の仕組みを解明し、コンヴィヴィアル(Convivial)な道具・行動と専門制度との均衡点を探ることにあった。」

(p,65)

イリイチフォーラム編「イリイチ・日本で語る 人類の希望」新評論、1981

あるいは分業化、組織化される以前の生活形態を今なお続ける人々の生活の描写から説明される。

「たとえば、アザラシを狩り、獲物を解体し、それを分配するという一連の作業を通じて、若い人たちが身をもって大切な道徳を学んでいくことができるのです。協力、忍耐、分かち合い、それから自らの属する集団への責任などといったことです。同じように、女性たちが行うアザラシの皮や脂や肉などの加工作業も、やはりいま述べたのと同じ文化的伝統を伝えていくための大切な手段になっています。

イヌイットの文化では、狩人たちは狩りをする動物たちには敬意をはらい、その死に対して責任を持たなくてはならないとされています。むやみに力をふりかざして、動物たちを支配するなどということは許されないのです。

……先進工業地域に住む人々が、自分たちの地域での動物に対する人間の行動ぶりを批判するのは別に構わないでしょう。けれどもイヌイットにむかって動物との共存の仕方を説くなどという権利は、彼らには絶対ないはずで、その点に関して、イヌイットはどこの誰からだって、教えを受ける必要などないからです。世界には、自分たちが自然界の秩序とは無縁の、まるきり離れた暮らしをしていると思っている人々もいるでしょう。でも私たちはちがうのです。(ネットシリングムイットのジョン・アマゴアリック氏の1985年1月のモントリオールでの委員会での発言。)」

C. W. ニコル「TREE」徳間書店、p,180、1989

注 ⑫

「スポーツで鍛えた体力と労働で使う体力はかなりちがうということである。熟生を出面に雇って欲しいと農協の人たちと話し合ったとき意外な言葉を彼らから聞いた。男より女が欲しいと云うのである。これは要するにどういうことか。瞬発力では男が勝るが、こと持久力という部分になると男は女にはかなわないというのだ。たとえば延々五百メートルつづく気の遠くなるような畝の畝。そこに這いつくばり一本一本玉葱の苗を植えて行く作業。最初男は張り切って前へ出る。女は後に置いてゆかれる。しかし一日終ってみると男は結局二畝しか出来ず、女は三畝やっているというのだ。瞬発力より持久力。これが労働の条件である。」

倉本 聰、「谷は眠っていた」p.48、理論社、1988

「体力というのは、抽象的に存在するのではない。身体のある面の能力だけを抽出して競うスポーツのばあいは別だが、人生における体力はもっと総合的、実際的なものだ。そうした体力は、実生活の場で、豊富な体験をすることによってしかえられない。生活のほうは部屋にこもってマッサージや体操に賢明になるのは本末転倒といわねばならない。」

毛利子来「新エミール」p,27、筑摩書房、1979

注 (13)

「主体としての身体」の中で「はたらきとしての身体」という側面を指摘し、このうちの「媒介された身体」として道具の使用例をあげている。また「拡大した社会的身体の広がり」として逃走距離やなわばりという例をあげている。

市川 浩「精神としての身体」勁草書房、1975

注 (14)

滝沢は、この非言語的な思考側面を体育の特徴として取り上げ、この独自の思考の説明を行っている。

滝沢文雄「身体運動における思考の独自性」教育方法学研究、第15巻、p.125～133、1989

注 (15)

このように、自分の感覚から自分の「からだ」や環境に対しての情報処理を行うことを著者らは、敢えて「ボディ・センサー」と表現する。

徳山郁夫、松岡信之「ボディ・センサーによるフィールド・ワークとしての体育」千葉体育学研究、第12号、p.51～56、1989

注 (16)

ヒューマン・スケールという側面について、著者らは1989年度千葉県体育学会第2回研究発表会にて口頭発表を行った。

注 (17)

実際には筋が緊張しても、外に「運動」として現れない場合もある。他者によって「運動」が観察されるような「運動」では、このような内側に生じた感覚に注意を向けるよりも、外界との間の著しい現象的变化をとらえる感覚に注意を向けてしまいがちである。外側には「運動」として現れないが、「からだ」の内側に伸張感、緊張感などを生じさせる静的な「運動」によってこれらの感覚を意識化する訓練も動きを考える段階として必要である。例えば野口の『野口体操』や竹内の『「からだ」と「ことば」のレッスン』などが挙げられよう。

参考文献

- 1) デュボス、R. 「人間であるために」 紀伊國書店、1970
- 2) フォックス、M. W. 「動物と神のあいだー共存のエソロジーー」 講談社、1983
- 3) 灰谷健次郎「われらいのちの旅人たり(対談)」 光文社、1986
- 4) 市川浩「精神としての身体」 勁草書房、1975
- 5) イリイチ・フォーラム編「イリイチ・日本で語る人類の希望」 新評論、1981
- 6) 板倉聖宣「科学の学び方・教え方」 太郎次郎社、1975
- 7) 菅孝行「関係としての身体」 れんが書房新社、1981
- 8) ケーン、J. E. 「ヒューマンムーブメントと体育」 不味堂、1987
- 9) 倉本聰「谷は眠っていた」 理論社、1988
- 10) 丸山圭三郎「文化とフェティシズム」 勁草書房、1984
- 11) 丸山圭三郎「フェティシズムと快樂」 紀伊國屋書店、1986
- 12) 毛利子来「新エミール」 筑摩書房、1979
- 13) ニコル、C. W. 「T R E E」 徳間書店、1989
- 14) 野口三千三「野口体操・からだに貞く」 柏樹社、1977
- 15) 竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」 ちくま書房(ちくま文庫)、1988
- 16) 竹内敏晴「『からだ』と『ことば』のレッスン」 講談社、1990
- 17) 上野千鶴子「<私>探しゲーム欲望私民社会論」 築摩書房、1987
- 18) 山崎正和「自己発見としての人生」 T B Sブリタニカ、1984

(1990年12月25日受付)